Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2026-07-25

金沢市における旧町名復活にみる地域アイデンティティと地域イメージ

宮本，真樹

(Citation)
兵庫地理,53:53-62

(Issue Date)
2008-03-31

(Resource Type)
journal article

(Version)
Version of Record

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/90002464

金沢市における旧町名復活にみる地域アイデンティティと地域イメージ

宮本真樹

1．はじめに

空間に対しては、公的なものであれ私的なものであれ、名前がつけられている。公的なものは地図などに公称地名として記されているもので、私的なものは個人または特定の集団にとっての名前である。Herman（1999）によれば、地名とは住民の空間に対する認識の表出であり、彼らの生活空間と密接に結びついた生活空間の具体的な現れであると解釈できるとしている（藤永, 2000）。人々の認識する地名の考察はその人々の生活空間を見ることにつながるはずである。地名は古くから存在し現在まで受け継がれ、人間の社会生活が営まれるところには必ず、場所を指し示す必要性から地名をつけられ、人々の日常的な生活のなかで使用されてきた。さらに、地名には地域住民の感情がしみこんでおり、単なる符号ではなく、共同社会の意識や感情のこもった存在として地域の生活に深く関わっている（谷川, 2006）。地名に関するこの説明の普遍性や日常における使用頻度についての論議は必要だが、地名に人々の意識や感情が含まれるという点は踏まえておかねばならない。

筆者は、本稿において「金沢市における旧町名復活」事業に注目する。なお、1942年の住居表示法改正前に行政上で「町名」と定められていたものを本論文では「旧町名」として扱っている。また、「旧町名復活」とは、一度消失したそれらの旧町名を現代に再度蘇らせようとする取り組みであり、2008年1月現在では、金沢市でのみ旧町名が８つ復活している。金沢市における旧町名について、橋本（2006）は旧町名を「まち」という言葉に置き換えて以下のように説明している。

「金沢市では、旧町名と一致する町会が多く、町会の活動もその土地の歴史や文化を背景にした日常生活に根ざしている。人々は過去の歴史や文化を現在の生活の中に引用して「いま」を認識している。その意味で「まち」は人々の目や耳で消費されてきた風景や街景ではなく、過去の人々の生活の蓄積の場なのである。それは「まち」に住む人々のアイデンティティを保証するものであり、集団の夢である。」

ここで、本稿における「旧町名」に関する定義を行う。人文地理学における「場所の」についての議論も踏まえておく。近年の人文地理学において、場所は大きく分けて３つの意味で用いられてきた（遠城, 1998）。一つ目は、「場所を個人や共同体の関係性の中で、特にアイデンティティ形成の基盤として理解」し、個人や集団が個別的な「場所」をつくりだして行くことを目指すもの（人文主義地理学的立場）。二つ目は、「「場所」を資本にとって好ましく整備された地表の一部として捉え、資本や情報の流れによって均質化された空間が形成されたのち世界において作り出される場所の差異を問題とするもの（マルクス主義的立場）。三つ目は、前二つの意味を合わせた、「「場所」が持つ個別性や差異が分析の上で重要であると考えながらも、「場所」をアイデンティティの拠点としてのみ、あるいは資本循環のための不可欠な手段のひとつとしてのみ、決定論的に理解するのではなく、個人や集団間の対立と協同を含んだ条件依存的な出来事の契機の場として」捉えようとするものである。本稿では、３番目の定義で「場所」という言葉を用いることにし、さらに、デヴィッド・レイの人文主義地理学的視点（遠城, 1998）も踏まえると、旧町名を「ただ単に場所を指し示すものではなく、日常生活で使用され、生活や文化の歴史が蓄積される社会構築物としての性質を持つ。また、人々のアイデンティティの基盤の一つになりうるもので、『場所』の差異が資本主義社会で重要であるように、その場所を示す旧町名が含み持つ差異もまた資本主義社会において重要な要素の一つとなりうる。」と定義する。

また、本稿の題目にある「地域イメージ」、「地域アイデンティティ」ついては、ただ単に「アイデンティティ」とする場合は広辞苑による意味[1]で、「イ

メージ」については「全体的な印象」という意味で用いることにする。地域アイデンティティと地域イメージについては、石見・田中（1992）の説明と前段の場所の議論を踏まえた上で、筆者なりの定義づけを以下のように行った。なお、その前提条件として、「地域にはその地域に根ざした（住む、あるいは働くなど）主体が存在し、ある地域を特定したとき、その地域と外部の地域は様々な原因（人の移動、情報伝達など）により相互に影響を与え合う。さらに、地域という場所には何らかの差異が存在し、人々はその差異に基づいて何らかの誇りを持ち、アイデンティティの拠り所にし、その差異は資本主義社会の仕組みの中に取り込まれる可能性がある。」と定めた。

地域アイデンティティとは、地域（場所）に関わる主体が地域に関するもの（地域の歴史や文化などの特殊性）と結びつけることによって他者に対する自己の存在を認識することであり、地域イメージとは、地域（場所）に対して抱かれるイメージであるが、地域内部の人も地域外の人にも抱かれ、地域内の人々のみが抱く地域アイデンティティとは異なる。さらに、地域外の人あるいは地域内の人によってイメージされるだけでなく、地域内の人が地域外の人に対して意識的あるいは無意識的に放つことでイメージを喚起する性格も持っている。ただし、地域イメージとその実態が必ずしも同じであるとは限らない。

さらに、地域アイデンティティと地域イメージは個々が独立するものではなく、相互に影響を与える。例えば、地域アイデンティティが高まったときにそれが何らかの手段を通じて地域外に表出し地域外の人に認識されたとき、地域外の人に抱かれる地域イメージに影響を与える。逆に、地域外の人による地域イメージを地域内の人が知ることでそれを自らの地域アイデンティティの要素の一つにすることもある。また、地域内の人がその地域に対するイメージが向上したことで地域的アイデンティティが確立されるという関連もある。また、地域には範囲と空間的階層性が含まれているのと同じように、地域に関わる地域アイデンティティや地域イメージを抱く主体にも範囲と空間的階層性がある。

本稿は、以上のような枠組みにより、場所につけられた旧町名という地名と、同じく場所を介して抱かれる地域アイデンティティと地域イメージとの関係を明らかにし、行政と地元住民という２つの視点を中心に扱いながら地域アイデンティティと地域イメージについて両者と関連させながら述べていく。

なお、本稿では金沢市を事例地として設定した。その主要な理由として、金沢市が旧町名復活事業を全国に先駆けて成立させたことと、北陸地方の中心機能を担う金沢市の都市部において旧町名復活が実現したことが挙げられる。前者については、特に国内で初めての事例を取り上げることで、旧町名についての人々の認識についてその理由を含めた深い理解を得られるのではないかと考えた。また、地名について行われた従来の研究では、対象の多くが農山村地域、近郊農村であり（関戸, 1989；藤永, 2000）、自然環境の中の地名と住民の生活形態や土地利用に関するものであり、地名認識と住民の生活の関係を見るという視点は有益なものではあるが、この事例が開発過程や発展段階を通じて地名と土地利用形態がほとんど一致しなくなる都市における地名認識において必ずしも有効とは限らない。したがって、都市部における地名認識について取りあげることが従来の研究とは異なる知見の獲得につながると考え、金沢の都市部における旧町名復活事業を事例に取り上げた。

また、近年の地方分権の重要性が求められる中で、地方自治の重要性について議論されることは多く、各都道府県や市町村の独自の条例制定や、「地域ブランド」選定の動きなど地方自治に関して注目すべき点は多く、財源面や権限の移譲など諸々の課題もあるが、地方自治による直接的な影響や、地域独自のものを創出する動きについて議論する意義は大きい。このように、地方自治体の主体的な活動が求められるなかで、「旧町名復活」がその可能性を示すものとなるのではないかという認識を持ったことも金沢市に注目した理由である。

本稿は「「旧町名」とその復活に対する人々の認識・思考とはなにか」という疑問から出発したものであり、その疑問解決の試みの中で、旧町名が生活の中で果たす役割を考察し、旧町名とその旧町名の存在する空間（地域・場所）に対して人々が抱くアイデンティティとイメージの関係について明らかにすることを目的とするものである。

２．調査地域概要

金沢市は「金沢御坊（金沢御堂）」の寺内町として始まり、戦国時代に前田氏が入城して以来280年間加賀藩の中心地として栄え、江戸時代には江戸、大坂、京都に次ぐ大都市になった。このとき城下町として整備されたことが現在の金沢の基盤になっている。また、今日まで約420年以上の間、大きな戦火に見舞われることなく、戦後も、繊維工業衰退後に大企業が入ってくることがなかったため，金沢は城下町としての歴史と風情が大きく損なわれることなく現在にまで残され、城下町特有のまちなみとされるような伝統的建造物群や入り組んだ小路などの建築的な都市構造、そして加賀友禅九谷焼などの伝統工芸やその文化が現在まで受け継がれている。伝統的な建築物や都市構造は残されたが、それは戦後の都市計画など近代的な発展を目指すことにおいて障害となることもあった。その状況下で金沢市独自のまちづくり（景観保存関連の条例など）が見られるようになり、建造物や都市構造などのハード面だけでなく、住民の生活とそれに関わる歴史などソフト面での保存も重要視されており、住民主体の住民参加のまちづくりを住民自身が意識する傾向が存在する（椎野，2001）。

旧町名と旧町名復活事業について述べる。昭和40年ごろまで、金沢市には江戸時代のころより存在していた町名が933あり（橋本，2006）、なかには金沢独自の町名もあった。しかし、かつての住所は土地所有にもとづく地番によって表されており、飛び地や配置が無秩序であったため、合理的な住所表示とはいえなかった。1962年に、郵便事業の効率化などの目的もあり合理的でわかりやすくするために住所を整理しなおすという国の方針に基づいて定められた「住居表示に関する法律が施行された。金沢市がその実施モデルとして「整備実験都市（38都市）に定められたこともあり、伝統的で由緒のある町名の多くが消失し、細かい区域の町は範囲の大きな町に統合された。ただし、中には当時の町名変更に対して反対した町もあり、それが現在までも残っている例は少数ながら見られる[2]うえに、町名変更後も消失した町名（以下、旧町名）やその範囲は昔から存在していた町会組織に受け継がれ、維持されている場合が多い（例えば、小学校単位の運動会などにおける旧町名の旗、旧町名単位の地域活動）。

しかし、町名変更後に新しい町名が定着しつつある中でも、旧町名への愛惜や旧町名へ関心が向けら

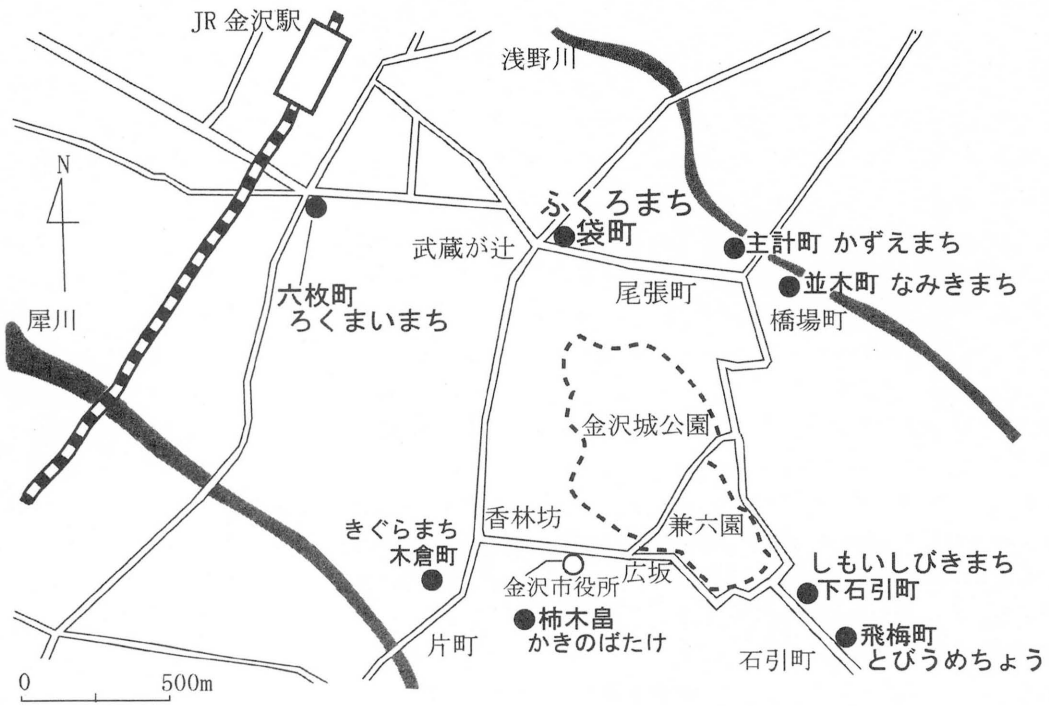

図1　事例地域

れる傾向があり、1979年に金沢市による市制90周年記念事業の一つとして「金沢市歴史のまちしるべ標示事業」で、旧町名や名称の中で伝統的で由緒のあるもの、人々に親しまれているものの石柱を建てた例がそれを表している。旧町名復活事業は山出金沢市長が推し進めたものだが、旧町名復活を先行して主張していたのは民間の立場にある金沢経済同友会である。彼らはかねてから、地域社会の振興のために様々な提言や活動を行っており、伝統的な地域の文化を活かし金沢の地名ブランド化を目指す経済活動のひとつとして旧町名復活を考えていた。1980年代から90年代にかけて同会会員の北陸中日新聞社と北國新聞社が旧町名復活のキャンペーンを行い、地域住民の旧町名復活に対する関心も高まった。それを察した山出市長が本格的に旧町名復活に取り組み、1996年3月市議会、1998年12月の住居表示整備審議会を経て、「関係住民全部の賛成に基づく申請」を前提として旧町名復活が承認された（橋本, 2006)。行政による旧町名復活事業推進の理由は二点あった。ひとつは産業構造転換や都市開発による大都市への人口流出と市街地空洞化などに対処するための住民コミュニティ発展継起とするもの。もうひとつは、技術発達に伴う住所特定の簡易化による、住居表示の利便性の相対的低下である。これらの行政の思惑と住民側からの願いが合わさり、旧町名復活事業が進められ、1990年に「主計町」が全国で初めて復活を遂げたのを皮切りに、現在まで8つの旧町名が復活している。2005年には全国初となる旧町名復活に関する条例[3)]も制定された。

以上、行政政策においての伝統的要素の保存と活用、まちづくりに関する住民の主体的な参加というような金沢市特有の歴史的背景があったからこそ、旧町名復活は民間団体から提唱され、行政主導によって実現したと考えることができる。

本稿では旧町名復活を遂げた８つの区域（町）について調査を行った。各旧町名復活の詳しい経緯や当時の状況から現在の様子などを把握するため、８つそれぞれの旧町名復活に深く関わった住民[3)]を中心に、また主計町、柿木畠、並木町、袋町においては、その他数名の住民に対して聞き取り調査を行った。調査期間は2006年11月下旬から12月中旬である。各区域について地理的・経済的状況などは表１のとおりである。

３．調査を通してみる旧町名復活

行政から得られた旧町名復活に関する説明は、当然だが主に行政側の視点で述べたものであり、「住民」という言葉こそあるが、実際の住民の意見などにはほとんど触れていない。本章では、住民に対する調査を通して得られた意見などを中心に扱って、各区域における住民の意見や視点を加えて各旧町名復活について述べる。まず、旧町名復活の全体の傾向とまとめを述べた後、いくつかの旧町名復活の具体的経緯を述べることにする。ただし、聞き取り調査の成果の差を考慮し、ここでは主計町、柿木畠、並木町の例を中心に扱う。

１）町名変更時の概況と町名変更後の町名認識について

金沢の歴史を踏まえれば、元来の「お上」（加賀藩前田家）にそのまま「お役所」が成り代った形と捉えられ、住民は上からの命令に素直に従うという土壌がある。1962年の町名変更に対しても同じ様子が見られ、旧町名の消失を残念に思っても「しょうがない」と考える住民がほとんどで、公的な反対意見は少なかったようである。しかし、前章で触れたように、中には反対した町もいくつかあった。

町名変更後も全体の傾向として、住民間では町会組織や商店街などにおいて旧町名が使用されていた。ただし、その認識度には差があり、旧町名を知る（使う）ものと知らない（使わない）住民の２つに分けられる。その分け方として、ひとつに世代または居住年数、もうひとつに旧町名への関わる程度の差によるものがある。前者は旧町名認識の差が世代間または居住年数の差に影響するというもので、後者は、町会活動や子ども会などで旧町名に関わる機会が多ければ、若い世代あるいは居住年数が少ない住民でも旧町名に対する認識が高まるということであり、これには町会活動が盛んかどうかや、旧町名が商店街名やバス停として残っているか、旧町名をよく知る人との関わる程度（例としてタクシー運転手）といった環境による影響が大きい。ただし、後に触れるが、主計町のような例では旧町名の認識とその使用程度が比例するとは限らず、そこには旧町名に対するイメージが大きく影響していた。また、金沢市には、金沢市制90周年事業によって建てられた旧町名を記した石柱が市内各所に見られる。

表1 旧町名復活を遂げた各区域の概要(旧町名が復活した順)

復活した旧町名	復活以前の町名	復活した日	区域内の世帯数、世帯内訳	町の特徴	旧町名の由来
主計町(かずえまち)	尾張町2丁目一部	1999年10月1日	計30世帯(料亭、商店、一般住宅)	料亭街、伝建地区	加賀藩士富田主計の上屋敷
下石引町(しもいしびきまち)	石引町3丁目一部	2000年4月1日	医療センターのみ	国立医療センター	金沢城普請用の石の運搬道
飛梅町(とびうめちょう)	石引町3丁目一部	2000年4月1日	計32世帯(一般住宅2軒、マンション1棟)	主に公共施設(学校、幼稚園など)	加賀藩前田家の家紋、藩士の家の梅の木説など
木倉町(きぐらまち)	片町2丁目一部	2003年8月1日	160世帯(うち商店103)	木倉町商店街	藩の材木蔵
柿木畠(かきのばたけ)	広坂1丁目一部	2003年10月1日	70世帯(商店街、一般住宅)	柿木畠商店街	防火用の柿の木
六枚町(ろくまいまち)	芳斉町2丁目一部	2004年6月1日	合計60世帯(一般住宅10軒、マンション1棟)	一般住宅街少数の商店	地子銀が6枚
並木町(なみきまち)	橋場町4番、9番、10番の各一部	2005年10月1日	計140世帯(一般住宅2軒、飲食店5軒他少数商店、マンション10棟)	マンション街少数の商店	浅野川沿いの松並木
袋町(ふくろまち)	尾張町2丁目一部安江町一部	2007年3月	商店25軒、一般住宅2軒(復活後のマンション完成[5]により大幅増加の可能性がある)	大部分が商店、他一般住宅	区域内の形(末が袋のように行き止まりになっている)

これには一部の人たち(子供や若い世代)の関心が旧町名に向けられた点や旧町名復活事業の土台の役割を果たすことになる点など旧町名の記憶を残す(継承する)場所としての意義がある。また、旧町名復活以前に町名の上の「旧」の字を気にかけたり、「旧」の字に町名が消されたことに意味があるとみなす住民がいたりする点は注目すべきであり、旧町名復活後、石柱の「旧」の字がわかるように消去していることを見ると、旧町名復活以前とは違う意味を持つものとして石柱を捉えられるかもしれない。なお、旧町名復活のきっかけをつくる主体は主に住民と行政の2つある。住民主導の場合、そのきっかけや目的は大きく分けて2種類ある。ひとつは旧町名に対する愛着による動機、もうひとつは住民コミュニティや商店街などの活性化による動機である。これらの場合は、住民が中心となって旧町名復活を推進している。次に行政主導の場合、行政にとっての利点をふまえた上での旧町名復活ということになり、そのきっかけは、(行政側から見た)住民コミュニティ活性化、旧町名単位での地域イメージの向上などがあるが、もっとも大きなものは歴史的資産を保存するという金沢市全体の地域イメージの向上である。これより以下では住民の視点を中心に述べる。

2)旧町名復活についての住民の反応

旧町名復活の計画提案当時、または復活過程において住民が抱く意見は、賛成、反対、無関心という3つに分けられる。

賛成の理由は、旧町名認識の高さと愛着、場所特定性に関する利便性、まちの活性化などで、反対の理由は、旧町名の認識程度の低さによる旧町名復活の不必要性や無意味さの主張や新町名への愛着のほか、もっとも現実的な理由として住所変更に伴う諸

雑用やその費用負担[4]がある。無関心というのは、「特に反対しない」タイプで、主に若い世代に見られ、旧町名への愛着や町会活動の参加頻度の低さや参加期間の短さが影響し、町名自体に関心がないか、町会組織の判断に素直に従う場合が多い。

旧町名復活後、主計町、下石引町と飛梅町、木倉町では「特に何も変わっていない」とする住民が多い。このような感想を持つ背景には、もとから町会組織がしっかりとしていたり、住民のコミュニティの場があったり、日頃から旧町名が認識されていたりすることがある。また、旧町名復活後の変化として、六枚町、並木町、柿木畠では、当初の旧町名復活の理由に含まれる住民コミュニティの整備や商店街の活性化がみられ、さらに、木倉町においては区域内の地域イメージが向上するという、当初の予想外の効果につながる例もあった。

旧町名に対する愛着やこだわりなどは旧町名復活の前提部分にあたり、これまでの説明にも触れてきたが、これと同時に旧町名以外の町名や、町名以外の地名についての住民の愛着・こだわりも存在する。そこには、旧町名以外の地名への認知度が旧町名のそれよりも高い、またはより良い地域イメージの選択や旧町名のマイナスイメージの払拭がその理由にある。

3）各旧町名復活区域について

以下、具体的な旧町名復活について説明していく。本稿では主計町、柿木畠、並木町の詳細について触れる。

まず、1999年の主計町は町名変更後、尾張町に統合されていた。尾張町は、前田氏とともに金沢へやってきた尾張商人たちにより形成された問屋町で、城下町時代の商業中心地のひとつであり、華やかさなど一般的に町のイメージは良い。しかし、町名変更後も主計町は住民の間で使用されていた。それは町会組織の名前、小学校区単位の運動会の組織、陳情書を出すときなど組織的な面だけでなく、日々の暮らしの中で主計町に関わる人たちにとっては、そこは「主計町」と呼ばれ続けていた。旧町名の使用は愛着からだけでなく、大きな町になったことで細かな場所特定表記が変わったことによる不便さを克服する手段でもあった。これらの点で、住民にとっては町名変更後も「生活の中では主計町」[4]のままであり、「意識と実体において旧町名はそのまま残っていた」[7]。そのため、町名変更後、主計町の御茶屋のおかみさんたちを始め住民は「主計町を何とかして残したい」[7]と思い、客として来た財界人（経済同友会など）に対して旧町名復活を持ちかけ、それが契機になり、市を挙げての旧町名復活の動きが始まったのである。ここにあるのは旧町名に対する純粋な愛着である。しかし、これらの愛着とは正反対のものが見られたことも事実で、実際に茶屋町であったことに基づくマイナスイメージを嫌うが故に旧町名をあえて使用せず、尾張町または別の地名を用いて自らの住所を表す住民もいたのである。この現象は、「主計町」という町名が立場によって抱かれるイメージが異なることを示し、主計町という名前にいい印象を持つ商店主、料亭に関わる人は良いイメージを意識し、それらにかかわりの薄い人は良いイメージを抱いていないことがわかる。また、現在では伝統的建造物群など観光的要素も町内で見られ、行政の側から見れば、旧町名復活にまちづくりや景観作りの意味も含めたと考えられるが、住民にとっては旧町名復活の主張と観光要素はあまり関係がなかったといえる。

次に、2003年の柿木畠について述べる。この町は1962年に行政中心地とされる広坂[8]に統合されていた。この地区の中心は柿木畠商店街であり、旧町名復活においてもこの商店街が中心に動いていた。そもそも商店街を立ち上げたきっかけは、片町と香林坊の発展に伴う周辺地区からの孤立への危機感であった。このように、柿木畠では常に周辺地域との対抗関係がある。また、町名変更後でも町会などをはじめとして住民の生活の中で使われていた。その理由には旧町名のわかりやすさ、場所の特定可能性など利便性からくるものと、昔からの愛着があった。たとえば、旧町名変更後の1985年に商店街を立ち上げた際にも、名前を「柿木畠」としたことが特徴的である。旧町名復活の話の提案時には、賛成と反対の両意見があり、賛成理由はもともと柿木畠であるという認識、反対理由は住所変更手続きに関わる諸雑用であった。また、反対理由では、「広阪のほうがいい」[5]という意見や、柿木畠の別地区で「片町がいい」[9]というものがあった。彼らにとっては、「柿木畠」よりも「広坂」や「片町」のほうが重要なのだ。「柿木畠という名前は田舎のイメージ」[9]が伴うことがあるということから、商売に関わる人は特に

広阪や片町のイメージの選択を好むのだろう。なお、旧町名復活後は、もとからあった住民または商店同士のコミュニケーションが高まるなど地域の連帯が一層強まったと評価されており、これは旧町名復活がきっかけとなって人々の町に対する意識が高まったためだと考えられる。

最後に、並木町について述べる。この町は1962年の町名変更によって橋場町に統合された。変更当時は、行政の指示に従った形で残念に思う人は多かったが、その後も、町会組織や並木町を知る住民の日常生活においては並木町が使われていた。その理由には町名への愛着、わかりやすさ（場所の特定性）があった。しかし、橋場町になってから移り住んだ住民にとっては「みんな『橋場町』だった」[10]と認識しており、並木町の認識は低い。しかし、昔からの住民のなかでは「区域外の人でも並木町と認識されていた」[10]と感じる住民と、タクシー運転手などが「橋場町」より「並木町」で場所を特定していた[10]という住民がおり、居住歴などによる認識の差異はあった。旧町名復活の理由には旧町名に対する愛着もあったが、このような場所の特定性、つまり利便性が大きいといえる。後者については特に（分譲マンション住民の新住民）による支持がそれを表している。また、旧町名復活に中心的に携わった住民によると、「住民の生活のしやすさへの配慮」[10]という目標とその手段の一つとして人間関係の改善の目的があったという。つまり、住民の入れ替わりなどでかつての人間関係が壊れ、現代の人間関係の希薄さにいくらかの住民が不安を抱き、旧町名復活を通して新しいコミュニティ作りにつなげることを目指したのである。旧町名復活に関して、かねてから町名に愛着を抱いている人の支持、利便性を求めるマンション住民を中心とした新住民の支持、加えて並木町の当時を知らない住民でも、旧町名復活が金沢市の観光化につながるのではという期待から支持するものもいた。賛成の理由は様々であるが、旧町名復活後には町会活動や町の子ども会の活動が活発化し、新たなコミュニティ作りが進む、あるいは人間関係が改善される兆しがあると認識されている。

4．旧町名復活に見る地域アイデンティティ・地域イメージ

旧町名復活においては、地域アイデンティティの確認や再確立、また地域イメージの構築や再構築が行われている。地域アイデンティティや地域イメージを抱く主体は、住民個人から旧町単位の集団、あるいは市町村レベルまで広範囲である。ただし、個人レベルを超えた場合、その主体は集団の多数派（多数派の共通部分）となり、少数派の思考が排除される等の問題が生じる。そのため、本論文のなかでも地域アイデンティティや地域イメージが常に少数派や異端な人々のそれを排除、または隠蔽（リン・ステーリ，2003）してしまう可能性への考慮が必要である。

1）旧町名復活と地域アイデンティティ

旧町名復活に関わる地域アイデンティティは、旧町名復活事業が起こる（旧町名復活が可能なことを住民が知る）時期を境にして２つに分けられる。いずれも、旧町名復活の推進に大きく関わるが、この時期以前からある地域アイデンティティの働きは特に大きい。主計町の例がその典型で、1962年の町名変更のころの料亭の女将などの間で見られた。また、並木町にも旧町名復活を通して、かつてより認識していた旧町名の存在を確かにしたうえで自己を確認する実践を行ったとみなせる住民がいた。いずれの例も「自分たちは〜〜町にいる」「他の町とは違う」という認識に基づき、旧町名時代から住民によるものが多い。もうひとつの地域アイデンティティ、つまり確立時期の遅い地域アイデンティティは旧町名復活の話の提案後、あるいは他地域の旧町名復活の実現後に生じるものである。そこでは、復活前は旧町名への愛着や関心のなかった住民が旧町名に関する知識（謂れや歴史）得ることで自分自身の存在と旧町名を関連させ、自己を確認している。

地域アイデンティティの前者はそのほとんどが住民達にとって固有のもの、あるいは直接的な体験によるものである。しかし、後者は旧町名の認知度が低い比較的若い世代や新住民などに見られることが多く、それは旧町名に関する話や資料に触れることよって新たな知識として構築されていくことになる。その過程には、郷土教育や郷土史など地域アイデンティティを高めるための何らかの媒体が存在し、多少の誇張や欠陥、付加が見受けられる。このように、地域アイデンティティとしての意味では両者同じであるが、その質や形成過程には違いが存在する。

2）旧町名復活と地域イメージ

旧町名復活と地域イメージには、旧町名それ自体による地域イメージと旧町名復活に関わる地域イメージがある。

まず、旧町名自体についての地域イメージはその多くが旧町名の由来に基づき、下石引町と飛梅町には、加賀藩の城下町のイメージを与えるもの（石、梅）が含まれ、それをアピールする金沢市行政側の意図が大きく作用し、旧町名を復活することができた。

また、旧町名に伴う地域イメージには他の地名あるいは昔のイメージと比較されるものがある。柿木畠は、都会を感じさせる広坂と繁華街として有名な片町や竪町に挟まれる立地にあるため、他の町名や地名との対比が顕著であった。「広坂だから（この土地に）来たのに」[9]とする住民や、別地区の下柿木畠は「片町のほうが良い」[9]から旧町名復活に参加しないという意見もあった。この地区ではとくに町名に対する地域イメージが重要な問題になっているのである。これに対応するため、旧町名復活を果たした柿木畠では、地域の活性化を狙うと同時に、柿木畠の町名に対する地域イメージを新たに構築（ブランド化）しようとしている。主計町では、歴史的な建造物が並ぶ落ちついた茶屋街としての雰囲気があり、良いと評価されるイメージがある一方、かつての遊郭街であるという悪いイメージとの対峙がある。現代では、負のイメージが何らかの正のイメージに置き換えられ、むしろかつての負のイメージである芸者を文化的価値のあるものとする傾向さえある。加えて、「尾張町のほうがよかった」[7]という意見があったように、旧町名と新町名それぞれに付随するイメージが対比され、町名使用の選択つまり旧町名イメージの選択が行われている点も注意すべきである。

さらに、ほとんどの旧町名復活区域では旧町名復活によって地域イメージが良くなっている。旧町名復活に必要な「全住民の同意」が、町会組織の指導力と住民間のまとまりを示すイメージを生み出し、区域外に対しては旧町名復活によって負のイメージが着くことはないだろう。木倉町では、かねてからまちづくりに力をいれていたことを踏まえたとしても、旧町名復活後の外部の反応や出展希望者の増加を見る限りでは、木倉町に対するイメージが良化したと考えられる。

以上のように、地域イメージにおいても地域アイデンティティと同様に過去から受け継がれる過程でそれまでとは異なる要素をイメージが付加されたり、消去されることがあり、柿木畠ではその様相が顕著であるといえる。

3）地域アイデンティティと地域イメージとの相互関連

旧町名復活を見るうえでは、地域アイデンティティと地域イメージの相互関連が見られる。たとえば、主計町の復活では地域アイデンティティが強くあった土台において行政が制度を整え、旧町名復活が実現した。しかし、行政にとっては、主計町の復活あるいは全ての旧町名復活には地域[11]イメージの構築という目的が含まれていると考えられる。旧町名復活の目的は、行政側が言うように各地域のコミュニティを良くする目的、つまり、各地域住民の地域アイデンティティの確立や再構築などが含まれるが、そこでは地域イメージも再構築されている。主計町では、旧町名復活以前から歴史的景観保存対象になっており、旧町名復活により歴史的な名前（町名）も保存し、歴史的環境保存地区という地域イメージが新たに構築され、外部にはそれが金沢らしいものとして捉えられ、やがて観光的要素となるが、主計町の住民は旧町名復活と観光を結びつけて考えておらず、あくまで彼らにとっての旧町名復活の目的は地域アイデンティティの確立であった。だが、行政の観光的側面から見れば、旧町名復活は地域イメージの再確立としての役割もあったのである。

柿木畠では、もともと商店街名として残っていたため、地域アイデンティティを再確認する意味での旧町名復活だったと考えられるが、旧町名復活の目的の中心には、商店街の活性化があり、周辺地区（広坂、竪町、片町）に対する対抗つまり他の地名の地域イメージに負けない独自の地域イメージの再構築があった。

並木町や六枚町の場合は、以上の２つ述べてきたものとは違った見方で旧町名復活に関わる地域アイデンティティと地域イメージについて見ることができる。並木町では、他者による地域イメージの影響が大きく、旧町名と関連のないはずのマンション住民が旧町名復活を支持した背景には、タクシー運転手という他者による地域イメージがあった。六枚町

の場合、地域アイデンティティが旧町名復活によって新たに生じた。また、本稿では詳細はの述べてはいないが、六枚町の住民は自分たちの住む町についての知識獲得により、新たな地域イメージを得、地域アイデンティティ確立し、その意識がまちづくりへとつながっている。ここでは、他者からの地域イメージに合うように、ある種の利便性を目指すものとして旧町名復活が捉えられ、さらにその過程で住民自身の地域アイデンティティが新たに作られていた。

5．おわりに

旧町名復活では、旧町名という地名を介して、地域アイデンティティや地域イメージの新たな構築や再構築が見られる。旧町名復活と地域アイデンティティ、地域イメージは相互に関連し、立場によって様相が異なる。さらに、地域アイデンティティと地域イメージの構築、再構築においては、無意識的にまたはある目的に合わせて意図的に歴史の一部を消したり、付加要素を加えたりすることで、過去から純粋に受け継がれたものと異なる場合が見られる。旧町名復活の詳しい経緯や背景は各旧町によりそれぞれ異なり、旧町名復活に関する立場による違い（行政か住民、あるいは町会組織など）や、各住民の性質（旧町名に対する認識度、居住暦、年代、町会への参加率など）にも影響する。また、旧町名復活後は、確立あるいは再構築された地域アイデンティティや地域イメージが、町に対する愛着や関心の高まりなどへとつながり、町会活動やまちづくりへの参加を促している。それはさらに次の世代へと受け継がれることで、将来の地域アイデンティティや地域イメージが作られる。旧町名復活のなかで、立場や世代によって旧町名（旧町名復活）の捉え方が異なっていたように、現代における旧町名復活は次の世代にとっては違った捉え方がされるかもしれない。そこには今と違った形の地域アイデンティティや地域イメージが存在するだろう。つまり、旧町名復活は現代における意味と同時に将来の地域アイデンティティと地域イメージ創出の基盤になるものとして捕らえることもできるのである。

金沢市では、旧町名復活に熱心な首長とそれに協力的な姿勢の行政、旧町名復活を願う住民の存在があって、全国で初めて旧町名復活が成功した。さらに、金沢市では、こまちなみ条例などに見られるような歴史的環境（遺産、文化資産を含む）を保存する土壌があることに加え、住民の生活の中に旧町名が残っていた。つまり、人々の中に旧町名に対する地域アイデンティティや地域イメージが構築され残っていた、または旧町名復活を通じて地域アイデンティティや地域イメージが構築・再構築されるような土台（町会組織や商店街）があったことが成功の理由と考えられる。

本稿では、行政と区域内の住民に視点をおいて旧町名を捉えてきた。しかし、旧町名に関わる主体は様々で、地域外にとっての旧町名に関わる地域イメージについても分析が可能であるし、旧町名範囲内の復活区域外の住民の旧町名認識も考察する必要がある。金沢市の市内の各地に旧町名を示すもの（石柱が典型例）が残されており、旧町名復活区域外の住民にとっても旧町名は身近な存在だと考えられる。今回の研究視点は、地域住民と行政という側面に限定しており、これだけでは旧町名復活について詳しく捉えることに限界があるだろう。ただし、認識主体を広げるときには、調査対象（地域範囲）と認識主体をどの範囲に特定するのかが重要であり、地域アイデンティティや地域イメージが誰にとってのものかという前提条件への配慮という課題は常に存在する。

また、今回は一度消失した旧町名の復活について見てきたが、金沢市内には「住居表示に関する法律」施行後も地域住民の反対により旧町名が継続した町があり、それらを見れば金沢市における旧町名の認識や現代における旧町名の意義についてさらに検討できるはずである。

最後に、旧町名復活について別の見解に触れておく。本論文では、場所に関する地理学的議論を踏まえ、地域アイデンティティと地域イメージに関わる事象を中心に扱ってきた。しかし、「場所についての政治」という異なる地理学的視点に立って旧町名復活を捉えることも可能である。リン・ステーリ（2003）の理論を用いれば、旧町名復活は旧町単位の範囲（場所）を住民の縄張りとして捉える「場所についての政治」と場所を人々が行為をするためのコンテクストとして捉える「場所における政治」が同時に見られるものと考えることができ、本論文とは異なった視点で考察することができるであろう。

また、「住居表示に関する法律」の施行とそれに伴う町名変更、そして現代の旧町名復活という行政と住民の動きをミシェル・ド・セルトーについての森（2006）の説明を参考にすることで、行政による町名変更を戦略と捉えれば、これに対する住民からの（行政側からではない）旧町名復活、あるいは町名変更に対しての過去の抵抗は戦略に対する戦術と捉えられ、旧町名復活を場所の政治として捉えることができる。さらに、旧町名あるいは旧町名復活を郷土意識確立の手段としてみるならば、地政学的観点での考察もできる。このように、旧町名復活は場所に関わる問題として捉えられる様々な視点で考察ができる可能性がある。

今後、地方の旧町名復活の動きの予想はできないが、人々が自らの地域アイデンティティを持ち、地域イメージによる影響を地域内外に関わらず与え、また逆に影響を受けることは確かである。その構築あるいは再構築される原因となる要素を探ることはいつの時代も意義のあるものだと筆者は考える。

付記

本論文は2007年1月に神戸大学発達科学部に提出した卒業論文「金沢市における旧町名復活にみる地域アイデンティティと地域イメージ」に大幅な加筆修正を行ったものである。本論文を作成するにあたって、金沢市市役所市民参画課、住民の方々に厚く御礼申し上げます。また本論文作成に関して指導してくださった神戸大学大学院人間発達環境学研究科の澤宗則准教授に記して感謝いたします。

注

1）人格における存在証明または同一性。ある人の一貫性が時間的・空間的に成り立ち、それが他者や共同体からも認められていること。自己同一性。同一性。
2）十間町、上・下近江町など。
3）「金沢市旧町名復活の推進に関する条例」（2004）による。
4）当時の町会長や現町会長、商店街組合会長など。
5）調査時にはマンションが建設途中であった。
6）住民すべてによる免許証や保険証、郵便物関係など住所変更に伴う変更届提出の必要、飲食店などは保健所や各関係機関との関連、焦点においては広告やハンコにおける住所表示の変更。
7）主計町における住民への聞き取り調査による。
8）金沢市役所などがある金沢市の行政中心地である。
9）柿木畠における住民への聞き取り調査による。
10）並木町における住民への聞き取り調査による。
11）この「地域」には金沢という広範囲やひとつの町単位の「地域」両方を含む。

文献

石見利勝・田中美子（1992）：『地域イメージとまちづくり』，技報堂出版，182p.
遠城明雄（1998）：都心地区の衰退と「まちづくり」活動をめぐって．荒山正彦・大城直樹編『空間から場所へ―地理学的想像力の探求』，古今書院，242p.
金沢市役所（2004）：ユニークなまちづくり条例を読み解く．地域開発，473号，13-19.
椎野昌宏（2001）：金沢市の景観保存とまちづくり．住宅金融月報，8号，14-19.
関戸明子（1989）：山村社会の空間構成と地名からみた土地分類．人文地理，41(2)，22-42.
谷川健一（2006）：地名は日本人の誇りの源泉．都市問題，97(4)，46-53.
野島宏英（2002）：歴史を紡ぐまちづくり―近世城下町金沢での実践―．月間文化財，460号，46-51.
橋本和幸（2006）：旧町名復活に取組む金沢市．都市問題，97(4)，63-37.
富士通ファミリ会（2006）：加賀百万石の城下町から始まった伝統工芸と旧町名の復活．富士通ファミリ会会報，312号.
藤永豪（2000）：都市近郊山村における地名からみた住民の空間認識―佐賀県脊振村鳥羽院下地区を事例として―．地理学評論，73A-7，578-601.
森正人（2006）：ミシェル・ド・セルトー．加藤政洋・大城直樹編著『都市空間の地理学』，ミネルヴァ書房，70-84.
リン・ステーリ（本岡拓哉訳）（2006）：場所と政治研究．空間・社会・地理思想，10号，127-137. Lynn A. Staeheli. (2003): Chapter 11 Place. J. Agnew, K. Mitchell, and G. Toal (eds.) *In A Companion to Political Geography*. pp. 158-170.

（みやもと　まさき・神戸大学大学院・人間発達環境学研究科 博士前期課程）